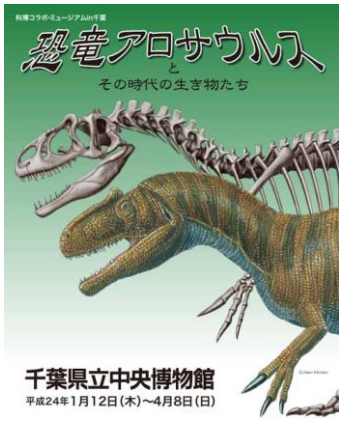
インタビュー 「恐竜アロサウルスがつなぐ地域の絆（きずな）」

千葉県立中央博物館では、平成２４年１月１２日から４月８日まで「科博コラボ・ミュージアム in 千葉－恐竜アロサウルスとその時代の生き物たち」を開催し、好評を博しています。生涯学習応援団ちばでは、関連行事として１月１５日（日）、生涯学習応援講座「恐竜発掘現場からのレポート」を開催し１００名以上の方にご参加頂きました。この展示会は“博物館と地域連携”を主要なテーマとしており、周辺の博物館・美術館との連携事業や、博物館と企業の連携などを実施しています。今回のインタビューでは、中央博物館の上野館長さん、博物館と企業の連携に尽力された千葉県経営者協会の石川清さんからその様子をうかがったものです。

生涯学習応援団ちば　現在中央博物館エントランスホールで開催中の「恐竜アロサウルスとその時代の生き物たち」展では、恐竜の骨格標本の展示が子ども達を始め多くの方々に人気を博していると伺っています。その一方、この展示会では博物館と企業との連携が行われているとのことですが、まずその現状などについて中央博物館の上野館長からお聞かせ下さい。

上野中央博物館長　企業などとの連携については従来から千葉県博物館協議会のご提言もあり、各館独自に「博学連携」、「企業との連携」、「ＮＰＯとの連携」などに取組んでいましたが、今一つ目立った形になっていませんでした。私が昨年４月に中央博物館の館長となった時、すでに今回のアロサウルス展を行う方向で検討しておりました。そこで考えたのは、折角恐竜という集客力のある題材が千葉に来るのに、中央博物館だけが活気づいても仕方がないということでした。また、恐竜の骨格標本を持っている科学博物館もこの展示を中央博物館ではなく、地域として受けてほしいという希望がありました。そこで、この恐竜アロサウルス展の主催者を千葉県博物館協会（県博協）にして、会場は中央博物館、そして周りの博物館や、企業、商店街などが活性化するような形になれば、「おっ、博物館もなかなかやるな」という評価をして頂き、博物館の役割や存在が認知されるのかなと考えました。具体的には千葉市の中央地区にある博物館の５館（県立中央博物館・美術館、千葉市立美術館・科学館・郷土博物館）が連携をして何かをやる、あわせて地元の商店街や三越、そごうといった大型商業施設と連携して双方にメリットがあるようにしようと考えたのが最初でした。このようなことは実は東京・上野の山にある博物館と地元ののれん会や商業施設がリンクしてやっている例がありますが、千葉でも何かをやってみたい、とにかく地域連携の第一歩を踏み出すことが大切だと考えました。ところが、博物館にはこのようなことで企業との交渉の経験がなかったので、千葉県経営者協会の石川さんに御助力をお願いしました。その結果、千葉三越、そごうでオリジナルのタオルをプレゼントして頂くとか、飲食店でドリンクサービスをして頂けるようになりました。また、そのほかにも千葉銀行から関連事業である体験教室の参加者全員にヒマワリの種を御提供頂くことも出来るようになりました。逆に三越やそごうのカードをお持ちの方が中央博物館においでになった時はオリジナルの缶バッジを差し上げましょうということでスタートしました。



応援団　この連携に当たっては、千葉県経営者協会の石川清さんが博物館と企業のいわば仲人役を果たされたと伺っていますが、その辺りの経緯や、どの様に働きかけをされたのでしょうか。

石川清氏（千葉県経営者協会社会貢献部会長・生涯学習応援団ちば理事）　私はこのお話しを中央博物館から頂いた時に二つのことを考えました。一つは私たち経営者協会に参画して頂いているメディア関係、これがどういう形で協力できるかということと、もう一つは博物館から依頼のあった周辺で協力してくれる企業にどういうところがあるかということです。一つ目についてはＮＨＫ千葉放送局、千葉テレビ、千葉日報等マスコミ関係は積極的な協力をして頂けました。二つ目の協力企業ですが、現在、企業の業績がいいと言っても余裕があまりない状況なので、一方的な協力ではなく、上野館長のお話しにもあるように、両方にプラスになる事業ということで千葉三越、そごう、そしてイメージアップに繋がるということで千葉銀行に協力を求めました。千葉銀行は将来的にもこのような文化事業にということで、今回接点ができたということは非常に大きいと思っています。三越、そごうにつきましては当初は、それぞれカードの利用を博物館でという話しがありましたが、なかなか困難な点もあります。そこで、どうすれば両方にプラスになるかということをお考えいただき、両社とも、この連携がイメージアップに繋がること、そして恐竜展や化石体験に子供が行くということは親が一緒に行くということであろうということから、積極的に協力しようというお話しがありました。そこで、上野館長のお話しにもありましたようにレストランでのドリンクサービス、ハンドタオルプレゼントなど、デパートはデパートなりに連携を模索して下さいました。さらに三越、そごうでの化石の体験教室の参加者の満足度が非常に高かったというアンケート結果があり、これは非常にいい結果になったと思います。私はこの恐竜展で地元の千葉三越、そごう、千葉銀行の協力が得られたこと、そしてマスコミが協力してくれたということが、今後の博物館の運営とか協力体制をとる上で非常に良いきっかけだと思っております。是非これがいい形で繋がるようなことになってほしいと考えています。

応援団　この連携による成果や、従来との違いなどを博物館として感じるようなことはありますか？

上野館長　石川さんのお話にもありましたマスコミとの連携ですが、今回は石川さんの御助力もあり、ＮＨＫ千葉放送局、千葉日報、千葉テレビのいずれもトップクラスの方にお会いすることができ、直接協力のお願いをすることができました。この効果は大きかったと思います。お陰で一般公開の前日には恐竜の骨格標本の組み立てを公開でやることになり、近くの幼稚園児、小学生などに参加してもらいましたが、それにあわせて千葉テレビ、ＮＨＫなどにその模様を放映して頂き、大変宣伝になりました。今でも土日は千人を超す入館者があり、今後春休みになればもっと入館者が増えるのではないかと期待しています。企業との連携では、先週末までの集計ですが、そごうや三越で半券によるサービスを受けられたのは３２０人余り。両デパートのカードを持って博物館に見えたのが１４０人です。三越、そごうとの連

携では入館者数云々ということ以上に、博物館の宣伝になったことは間違いないと思います。「千葉の博物館はそんなことをやるんだ」と思って頂くことができたということは第一歩として成功だったと思います。今後、再度アンケートを取ってみてどの様な結果が出るのかが楽しみです。

石川氏　私の方から、明らかに変わった点を申しあげますと、従来は博物館からの働きかけに対して「協力」だけだったのですが、今回はそごう、三越が独自のポスターを作って独自の広報をやってくれた。これは二つの意味がありまして、一つはデパートが博物館と提携するということでイメージアップにつながった。これはそごうではっきり言っております。もう一つは、それが実質的に集客につながったという事実ですね。これは今後に大きな期待が持てるわけで、今後の事業によっては慣例化することになれば素晴らしいと考えております。

上野館長　今後とも継続することで、だんだん慣れてくるし、落ち着いてくるし、違った取り組みについて気が回ってくるのかなという気がしています。

応援団　先ほど上野館長さんから中央地区の博物館の連携ということが言われており、その辺が今回の一つのキーになる部分かなという感じも致しましたが、これについてはいかがでしょう。

上野館長　関連事業の化石の発掘体験では中央博と千葉市の科学館で連携して行うことができました。もう一つ、これは初めてだと思いますが、県立美術館と市立美術館が連携して中央博物館で関連事業（体験「僕は恐竜を飼うことに決めた」）を行うことになりました。その間、紆余曲折がありましたが、県立美術館が困難な問題をクリヤーし、市立美術館にも普及活動に熱心な方がおり、実現に至りました。このことを通じて、お互いにこんな人材がいるんだということを認識しあい、人材の発掘ができたという点で良かったと思っています。これからに期待が持てると思います。

応援団　今回の連携を踏まえ、今後検討したい課題などはいかがでしょう。

石川氏　私の方の課題は、当初二つのデパートが協力をしてくれるということで、その担当者と会ったのですが、博物館のチケットで割引をするということに対して、多くの売場に多くの従業員がいることから、その全てに博物館の半券を理解してもらうことができないという問題がありました。従って一番徹底しやすいレストラン街で行うことになりました。これはレジだけ徹底すればいいわけです。これが今後どのような形で持っていけるかによってはまだまだ広がりができると思います。

上野館長　今の博物館の半券のことで言えば、入場券の半券でサービスを受けられるわけですが、県立博物館では６５歳以上と中学生以下は無料で、半券が出ません。そこで臨時の券を発行することにしました。これを各館でやるとばらばらになるので、中央博物館でひな型を作り、それを中央地区の他の博物館に回して対応をお願いしました。このようなことがうまくいけば、今後は共通のパスポートの様なものに発展していけるのではないかと思いました。ただ公立の博物館の場合、条例・規則の問題もあり、館の運用で何でもできるわけではないので、今後、そのあたりが何かうまく対応できるといいなという

感じがしました。

応援団　先ほど上野館長から東京の上野を一つのモデルにしているというお話がありましたが、その辺のことを踏まえ、博物館として今後どのように取り組んでいきたいのかをお聞かせ下さい。

上野館長　県の施設であろうが市の施設であろうが、博物館はここにある、ここに立地しているということですから、地元の方々に知ってもらい愛してもらうことが大切だと思います。その意味では、今回三越、そごうといった大きいとこととの連携をやりましたが、本当は地元の商店街などと連携が出来れば「オラが街の博物館・美術館」という意識が出来てくれると思います。今後は、一つ進めて地元の個人商店も含めた商店街と連携をして地域の活性化に役立つようなことになればいいなと思います。

応援団　経営者協会（社会貢献部会）として、これからの見通し、これをどの様にしていきたいかというお考えをお聞かせ下さい。

石川氏　もう言い古されたことですが、各企業は正社員を減らし収益を増やすというやり方にこの５～６年変わって参りました。その結果、企業収益は上がっていますが正社員を減らしたためにいろんな問題が起こっている。例えばいろいろな活動をするにしても社員の動員ということが昔と違って出来なくなっている。ただし、収益が上がっているのでその収益をどうやって生かすかという点については大変考えているところです。株主との関係があって、広告費に対しては最近敏感になっておりますが、収益を企業の社会貢献に繋げるものに使うということであれば理解を得られる方向に行っております。こうした流れを、地元の文化活動やスポーツ活動とのかかわりに繋げるということについては、皆自覚をし始めていますので、そうした方向に繋げていければと考えております。

応援団　最後に、博物館は今後の活動の中で色々な主体との連携をしていくようになると思いますが、今回の経験の中で連携の難しさや面白さ、こんな風に進めてみたい、といったようなことがあればお聞かせ下さい。

上野館長　多様な機関や団体と連携することは大変なこともあれば、楽しいこともあります。それをどれだけ博物館（スタッフ）の全員にわからせるか、出来るだけ多くの館員の味あわせることができ、博物館として経験を蓄積させるかということだと思います。それが博物館としての課題だと思います。

石川氏　私の方からは、今後のこととして、各企業が今回の千葉銀行、そごう、三越にならって広がりを作るということにつきます。もう一つはデパートが協力してくれるために半券の周知をどの様に扱ったらよいのか、これは研究の余地があるなと考えています。

応援団　本日はお忙しい中、貴重なお話しありがとうございました。

（インタビュー：平成２４年３月５日）